

大杉栄らの墓誌

建立委員会

ニュース

終刊号 1977・5・16

編集発行人

大杉栄らの墓誌建立委員会

静岡県富士市伝法上中町2719

富士地区一般産業合同労働組合内

TEL 0545-52-2691

印刷

海野印刷

大杉の想い出

荒畑寒村

大杉の事は、もうみんな話し尽し、語り尽して、今さら何か話しても、お互に……ない。

折角の機会ですから大杉とはじめて逢った時の事等一つ、二つお話しをする事にします。

はじめて大杉に逢いましたのは東京の有楽町の今の朝日新聞の隣りに、日本劇場と云う映画館があります。その裏手に明治36年の末から38年にかけて「平民社」(日本の社会主義の揺籃でありました)がありまして、そこで、はじめて大杉に会いました。と云うのは、当時の平民社では週刊平民新聞と云う社会主義の機関紙がありまして、幸徳秋水先生、堺利彦先生の方で出て居り、毎土曜日になると、大勢同志が集って、刷り上ってきた週刊平民新聞の発送を手伝うんです。いつも二・三十人は集りました。その作業が終わりますと、社内の長いテーブルを囲んで皆で夕食をたべる。おかずがネ、たいてい芋の煮ころがしか、豆腐の煮た物位いにすぎませんでしたが、何しろ荒らくれた壮年の社会主義が集って、飯をかき込み乍ら、議論を吹きまくるものですから、ものすごい気焔で、何時も座談の中心になっていましたのが、山口孤剣と称する同志で、これはヤソ教から社会主義に転向した。ある日、本郷のヤソ教会館前を通ると、日曜説教の立看板が出ていたのですネ。それが「信ずるか、信ぜざるか。牧師宮崎八百吉」と書いてあった。宮崎八百吉と云うのを、今の人は御存知ないでしょうが、私共の青年時代に岩崎湖処子と称した人が「帰省」と云う内容の本を出しまして、これが当時の青年の間に非常に愛読されて、所謂「落陽の紙価」を高めると云う売れ行きだったんです。この山口はそれを知って居るものですから、宮崎八百吉と云うのはどんなやつか、一つ見てやれと云うんで、冷やかし半分に会場に入ったら、岩崎湖処子、八百吉牧師が、あの「信ずるか、信ぜざるか」と



云う演説だったんですネ。それを聞いて立所にヤソ教に入ったと云う男ですが。それが、平民社の、まあ社会主義者になりまして、いつもの土曜の新聞発送の手伝いのあとで、飯を喰い乍ら、その座談の中心になって縦横無尽にしゃべりまくるのですネ。幸徳秋水が、山口がまだヤソ教から入って来て、まだすっかり抜けきらなかったものですから、彼をひやかすんです。山口にはその時分すでに「社会主義と婦人」「破帝国主義」と云う本を出して居りましてネ、これなんかまだ「万人の主エホバ、我を助け給え」と云うヤソ教のお

経の言が入っている位に、まだ、スッカリ抜けきっていないものですから、幸徳秋水がカラカッて色々と言うと、山口はむきになって「貴方は、そんな事を云うのは新神学を知らないから」なんていって屈しないのです。

そんなもんで、堺も幸徳もあるもんかなんてネ、皆、青年が特異な意見を闘わせて、実に賑な会でした。

その時分、大杉は、おとなしい男でした。その議論なんかに加わらない。だまって、こう髪をきれいに分けましてネ、そうして、チリーつ止めない外国語学校の制服を着て、皆なが、大杉のことを「オーハイ・オーハイ」と云っているんで、何んで「オーハイ」と云うのかと思ったら、大杉ハイカラの略語なんですネ。その時分、まだ16、7の子供でした。

それから明治41年の1月にはじめて日本に社会党が出来ました。明治34年に社会民主党が出来たのは、歴史的には第一回の社会党でしたが、これは即日禁止された。それで明治40年に出来た社会党は、これは歴史的には第二回目の社会党です。今の日本社会党は歴史的には第三代目です。昔から「売家と唐様で書く三代目」と云いますが、今の日本社会党が「売家」と書く様な結果に陥らない事を望んで止まないのです。

その第二回目の社会党ができました時、東京の市電が電車賃値上やるんです。その当時まだ電車は市営になって居りません。私立の会社が三つありまして東京市に電車を走らせて居り、その三社が合同して、共同して電車賃の値上げをした。3銭から5銭位と思うが、社会党が中心になりまして、細野次郎、田川大吉郎などと言う市民団体、それに山路愛山の国家社会党、この三つが合同して日比谷公園で、電車賃値上げ反対の東京市民大会を開いた。その大会のクツレですネ、所謂デモが東京市役所へ押しかけまして、投石をするやら、電社会社へ押し寄せて投石、窓ガラスを破るやら、電車をヒックリ返したりなんかしたのを「兇徒聚集」今なら暴行罪でしょうが比時「兇徒聚集罪」と云うものがありましてそれに引かかったんですネ。で出来たての社会党の中堅の活動家の青年十人が「兇徒聚集事件」の被告になった。一般市民の間からも十一人の被告が出ましたが、社会党は、結党早々に有力な活動家を引っこ抜かれたのです。その中の一人が大杉なんです。今のその被告として拘留所に入れられたのです。

私は丁度、紀州田辺の「牟婁新報」と云う田舎新聞の記者をしておりましたが、皆やられたというんで、



こんな所でぐずぐずしてはいられないと東京に帰って来た。それで堺先生の家へ居候したんですが、其時にやはり、保釈で出て来た大杉、それから深尾と云うのも堺さんの所へ転がり込んで来た為三人の居候を抱え込んだ。それで、大杉に逢った時に、大杉が私に話するに、拘留所に入れられた時に、お父さんの東さんが面会に来たと云うんですネ。それで顔を見るなり「なんじは!」と云ったと言うんですネ。大杉は僕に「僕は文章を書く時に『汝』と書く事はあるけれど、面と向って『汝』と云われたのは、生れてはじめてだ」と語っていましたがネ。それで、その内に明治41年に赤旗事件と称するものが起りまして、大杉も私も有罪になって、千葉県千葉市内の貝塚と云う所に出来た新しい監獄へ送られた。その時にですネ、入った翌日に七人一緒に居たんですが、それが運動場に引き出されて須田と云う看守部長が大きな帖面を持って来て、在監人の新入り囚人の身分調べをするのですネ、堺彦彦、何年何月何日、福岡県のどこどこに生れる、てなことを、その部長さんがちゃんと調べるんですネ、それで大杉に来るとネ、須田部長が「大杉栄、苗字も同じ大杉だし、名前も片っ方は東、片っ方は栄、一字名だし、大杉お前は、大杉東のなんだか」ときいたんですネ、大杉は黙ってニヤニヤ笑って物を言わない。堺さんが、そばから「あ、あ、大杉東は栄のオトツツァン

ですよ」須田部長がびっくりしましてネ、「そうか、私が軍隊に居た時に大杉少佐殿には大分お世話になったんだ。」下士官だったんですネ。「大杉少佐は日露戦争の時、黒溝台の戦で指揮官として殊勲を樹てた人なんだ。あの人にお前みたいな奴がいたのか」と云う訳です。

考へて見ますとネ、黒溝台どころか、そこで闘った日本軍が第何軍か知りませんが殊勲を樹てたって云う軍人が少佐でもって、予備役になるんですから、軍人として余り出来のいい軍人でなかったと思うんですけども。大杉の人間形成に非常に役に立ったのは、お父さんの東でなく、お母さんらしいんですネ。私は大杉のお母さんに会った事はありませんが写真を見ますと、実によく大杉に以ている。殊にその大杉家の家系のその眼の大きさなんてのは、大杉とそっくりなんですネ、それに容貌ばかりがお母さんに以て居た訳ではなく、お母さんの教育方針なんてものが大杉の人間形成の上に非常に大きな影響を持って居たと思いますのは、大杉は子供のじぶんは、何かいたづらや、わるさをすると、お母さんが「栄、掃を持って来い！」というんですネ、大杉が掃を持って行くと、その掃を持って、大杉をブンなぐる、しょっちゅうそれをやるもんだから、お母さんが、「栄、掃を持って来い」、掃を持って行きゃあ、なぐられるという事がもう判って居るんですネ、何時もその例になって居る。それでも「栄、掃を持って来い！」と云われると掃を持って行くんですネ、それで、お母さんが、「栄は掃を持って来れば、ぶたれる事が判って居るのに、何だって掃を待って来るんだ」と云って掃でぶんなぐると云うんです。そういうお母さんの教育方針、教育方針かどうか判らないけれど、そういうやり方がですネ、大杉の、その物に屈しない、大杉だって人間ですから、悲しい時は、悲しくもあろうし、苦しい時は、苦しくもあろうけれども、僕だったら苦しい時はヘコたれるけれども、大杉は苦しい時になると「何くそ！」と殊更に立向って行くという大杉の一癖は、そういう具合に、私は、養われた、天性もあるでしょうが、養われたのが多かったと思うのであります。

彼はドモリでしてネ、御承知の方が多いと思うけれども、ドモリですけどネ、普通のドモリと違うんだな、普通のドモリは、トトトトッと云うドモリなんだがネ、大杉のドモリってのはネ、トトと出ればもうすらすらと云うのだけれど、出るまでが大変なんでして、目を

白黒さして、一生懸命になってやるが、中々出ない。伊沢修治というこれは学者ですがネ、この人が、落籍社(?)と云うのをやって、これはドモリの矯正をする社ですネ、と云うのがありましてネ、明治40年前後に大杉もそこに通ってドモリの矯正をやっている、ドモリと云うのは、カ行が一番云いにくいんだそうですネ、カキクケコが。それで、大杉が、そのドモリ矯正の教科書みたいなものを行っているのを見ると、もう実に僕は吹き出さざるを得ないような、「兎と亀が、かけっこをして、脚気になって、カッコン糖を飲んだ」なんてやっているんです。

それで彼は、そのお父さんも軍人でしたから、自分も軍人になるつもりでしたでしょう。陸軍幼年学校に行った。それが、この暴れん坊でして、とうとう幼年学校を放校になるんですが、これは、男色事件が何か何かなんだ。一体ネ、軍人の学校ってもんには、そういう悪風が、これは日本だけではないですよ、クロボトキンの「一革命家の思い出」という本を読んだ方は御存知でしょうが、クロボトキンも、何と云うのか、とにかく帝制時代のロシアの幼年学校みたいな所に入っている時に「東洋風の悪風が生徒の間に流行した」と書いているんだが、東洋風の悪風ってのは、所謂男色なんです。だからネ、何もネ、それを東洋風なんていうのは、僕は甚だけしからんと思うのだけれども、どちらが先かわかんヨ、とに角、その日本でも幼年学校に、所謂東洋風の悪風が盛んで、大杉もそれでもって、とうとう放校された。それだけじゃない、随分暴れたかなんかしただけでしょうが、そういう事が原因で放校になる。

幼年学校では英語とか、フランス語、ドイツ語とかいうものを強制的に生徒に習わせるんだそうで、大杉はフランス語をやっていたものですから、幼年学校を放校されると直ぐ東京外国語学校、いまの外語大学ですネ、そこのフランス語科へ入ったんです。平民社へ来て、「大ハイ、大ハイ」といわれていたのは外国語学校のフランス語科の生徒時代だったわけです。

彼はどういう了見か、今になって判らないのですが、ヤソ教徒になりまして洗礼を受けたんですヨ、大杉がネ、ヤソ教になって洗礼を受けたなんて云うと、今の人は知らない人が多いもんですから、そんな馬鹿な事がと云うかも知れませんが、海老名弾正に洗礼を受けたヤソ教徒なんです。ですけども、日露戦争で日本のヤソ教界が戦争の開始に当ってこの戦争を是認し、日

本政府の戦争政策に協力する態度に出たのに憤慨して、ヤソ教に失望して、社会主義に入って来た人が多かった。中年の人は、中年以上の人は、理想団に対して、理想団というのは御存知ない人が多いでしょうが、万朝報の社長の黒岩周六、黒岩涙香ネ、あの人が主唱して、そうして朝報社の社員等も、朝報社以外の新聞社をも網羅した、所謂修家斎民、東洋風の家を修めて、それから国を治めて、更に社会に徳を及ぼすと云う、その思想を実現すると云う事を目的とした団体ですネ、之には堺利彦、幸徳秋水、木下尚江、安部磯雄等その時代の社会主義者が皆名を連ねて入りましてネ、と云うのは、明治34年に社会民主党が禁止されたものですから、皆理想団へ入って行った。で各地に支部が出来まして、理想団の幹部がよく地方の講演に行ったんです。それで、その幸徳とか堺とか、木下なんかの講演を聞いて理想団で社会主義に傾倒した人が多かったものですから、日露戦争になって、平民社によって、堺、幸徳両先生が非戦論を唱へると、そこへドッと流れ込んで来たのですネ。中年以上の人は概ね理想団を経て来ている。青年はそのヤソ教に失望して、社会主義に入って来たと言う人がおりましたけれど、多かった訳です。それから、まあ、電車問題の値上反対デモで兇徒聚集事件で喰い込んだのが、大杉の監獄入りの皮切りで、その次に我々の赤旗事件で、大杉と僕は7人の中で一番悪いといわれましてネ、須田部長が僕等の担当だった時分にはまだ良かったんです。その大杉東少佐の下で非常に世話になったと云う様な関係もあったんでしょう。非常に私共に同情を寄せて須田部長が影になり日向になりして面倒を見て呉れたものですから、非常に良かったんです。飯が足りなくて腹が減ってしょうがないと云えば飯を足して呉れましたし、冬になると寒くてしょうがないと、寒いと云わない内に、「裁判所でもって一定の刑期の宣告を受けて入って居るんだから、寒いって云うのは二重の刑罰じゃないか」てな事を云って喰ってかかって、私共はフトンを増して貰ったりなんかして非常に良くして呉れたんですネ。運動場に出ましても、皆七人、私共が入ったのは第六舎かなんかでもって、そこは60人位い入るんです。皆独房でしたがネ、だけど、それで、入浴でも運動でも60人皆一緒に出るんですが、そんな中で7人だけは特別なんですナ。その連中と一緒にしない。湯に入るんでも、運動に出るんでも「7人組出房」てな事ですネ。7人組は特別扱い、そういう時は、大杉のお父っあん

の余徳をこうむったと云う訳です。その須田部長が小田原の少年監獄へ転出して、後任の部長が来て、前任者の僕等に対する手心を苦苦しく感じてたのですネ、それだもんですから、或る日の運動場に出たら、塀の外をカラカラと音がして荷車を曳いて居る音なんですネ、そうして、荷車を曳いている男の歌を唱う声が聞こえて来るです。運動していると春先ではあるし、体もゆるんで、いい気になって、空気はいいし、ブラブラ運動して居たら、外の荷車のキシム音がして、歌を唱って居るんです。大杉が私の方を向いて「どうだ寒村呑気だナ」と云うです。丁度その時その歌が止んだんですネ、僕がそれに連れられて、「あ、コリャコリャ」とやったら、大杉と僕が減食3日を喰った。という事で、まあ、それまでは、そう親しく無かったけれど、大杉と親密になりましてそれで・・官にもらう浅草海苔(?)ををためておいて、それから雑役からもらったエンピツの芯で　　の交換をやってネ、其時出たら何かやろうじゃあないかと云う相談があって、実は千葉監獄でもう既に出来た訳なんで、そうして、大逆事件の余波でもって手も足も出ない、所謂その「冬の時代」になった訳です。それで堺さんが雌伏して時機の来るのを待つべきだと云うんです。実際に、そうに違いないでネ、何かやろうとしても手も足も出さないから、雌伏して時機の来るのを待つて居る外は無い。そうは判って居てもネ、さて堺さんのように、雌伏して時機を待つべきだと云って呉れる人がないもんだから、大杉や私の様な未だ若い少々飛上り者には、堺さんの云うその真意が判らんのです、如何に圧迫が酷いからと云って、何時まで無為に過したってしょうがない。時機なんてのは、向うから来るのを待つべきじゃない、こっちから進んで作るべきだなんて事を二人で云いましてネ、これが「近代思想」を二人ではじめた端緒となったわけです。それから大杉はもう皆さん御承知でしょうから、長くなりましたので、このへんで。(終り)

本稿は芳村和勇君が、録音テープから筆記したものを、杉山金夫さんに校閲して頂き、更に福田が、テープ録音と照合しました。

人名や地名等あて字で間違っている所がある事と存じますが、印刷費が当初予定より安くあがりましたので、これを追録する事にしましたので、荒畑先生に見て頂く時間がありませんでしたので、文責は出版者にあります不備の点はおゆるし下さい。